



Takashi Sato Schubert-Zyklus

佐藤卓史

シューベルトツィクルス

ピアノ曲全曲演奏会

第22回

ピアノ・ソナタⅦ

—終わりのないハ長調—

フランツ・シューベルト:

メヌエット イ短調 D277A (1815?)
(ピアノ・ソナタ 第2番 D279 第3楽章の初稿)

ピアノ・ソナタ 第2番 ハ長調 D279 (1815)
(未完・佐藤卓史による補筆完成版)

ピアノ・ソナタ 第11番 ハ長調 D613+612 (1818)
(未完・佐藤卓史による補筆完成版)

ピアノ・ソナタ 第15番 ハ長調 D840《レリク》(1825)
(未完・佐藤卓史による補筆完成版)

2025年 5月 12日(月) 18:30開場 18:45プレトーク
19:00開演

東京オペラシティ リサイタルホール

入場料(全席自由): 一般4,500円 学生2,500円

design by MAI KUDO

後援: オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム東京、ベーゼンドルファー・ジャパン、株式会社河合楽器製作所、島村楽器株式会社、一般社団法人日本ピアノ調律師協会、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)、フランツ・シューベルト・ソサエティ、月刊ショパン、東京藝術大学音楽学部同声会

マネジメント・お問い合わせ: アスペン 03-5467-0081

チケット取扱: 電子チケットサービスteket(テケト) teket.jp/3117/43864 …QRコード…▶

東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999 アスペン 03-5467-0081

チケットぴあ t.pia.jp (Pコード: 288-004)

佐藤卓史公式ウェブサイト www.takashi-sato.jp



Aspen

佐藤卓史シューベルトツィクルスとは・・・

第11回シューベルト国際コンクールの優勝者佐藤卓史が、フランツ・シューベルトのピアノ関連器楽曲(独奏曲、連弾曲、室内楽曲)のすべてを網羅的に演奏するライフワークプロジェクトとして2014年に始まりました。最新の研究成果を駆使した知的な洞察、独自の観点からの未完作品の補筆など、作曲家への愛情と共感に溢れた新しいシューベルトの世界を提示しています。

使用ピアノは「ベーゼンドルファー・インペリアル」。

ベーゼンドルファー社はシューベルトが他界した1828年にウィーンで創業、以来世界有数のピアノメーカーの一角に君臨し続けています。昔ながらの手づくりでこだわり、鉄骨フレームではなく木製の外枠で弦の振動を増幅させる設計は、他のピアノとは全く異なるベーゼンドルファーだけの特徴。これによって生まれる優しくまろやかな音色は「ウィンナ・トーン」と呼ばれ、シューベルトに代表されるウィーンの音楽との相性は抜群です。なかでもフラッグシップモデルの「290」は、通常のピアノよりも低音域が9音拡張され、97の鍵盤を持つ超大型コンサートグランド。拡張された9鍵は、通常使用されることはありませんが、低音弦の共鳴が深く温かい響きをもたらし、「インペリアル」の愛称で知られています。



「未完のハ長調ソナタ」3曲に補筆を施し、完成形で演奏。このシリーズの名物企画、最終回!

《グレート》交響曲、弦楽五重奏曲、ヴァイオリンとピアノのための幻想曲、連弾のための《グラン・デュオ》など、シューベルトが書いた「ハ長調」は天国的な広がりや無垢さを湛えた名曲揃いです。全24曲(断片含む)のピアノ・ソナタのうちハ長調は3曲。しかし3曲ともなぜか未完のまま残されました。シンフォニックで大胆な初期作第2番D279の終楽章はわずか6小節で中断。両楽章とも未完成の第11番D613には、緩徐楽章としてハ長調の「アダージョ」D612を挿入して演奏します。そして《レリク》(聖遺物)の別称を持つ第15番D840は後期大ソナタの先駆けとなる壮大な傑作です。シューベルトの全ピアノ曲を弾いてきた佐藤卓史の手によって「終わりのないハ長調」に終止線が引かれます。補筆完成版ソナタが聴ける最後の回、ぜひお聴き逃しなく。

詳しくは連動ブログで!

シューベルトアーカイブ電子版

検索



◀ schubertyklus.blog.fc2.com

Profile

プロフィール ● 佐藤卓史(さとう・たかし)

1983年秋田市生まれ。高校在学中の2001年、第70回日本音楽コンクールで第1位。東京藝術大学を首席で卒業後渡欧、ドイツ・ハノーファー音楽演劇大学ならびにウィーン国立音楽大学で研鑽を積む。その間、2006年ミュンヘンARD国際コンクール特別賞、2008年シドニー国際コンクール第4位ならびに最優秀ショパン演奏者賞、2010年エリザベート王妃国際コンクール入賞、2011年カントウ国際コンクール第1位、メンデルスゾーン国際コンクール最高位など国際舞台で数々の賞を得た。とりわけ2007年第11回シューベルト国際コンクールでの優勝と、世界各地での演奏活動により「現代随一のシューベルト弾き」の国際的な名声を獲得。ウィーン楽友協会をはじめ欧州から中東にかけての主要コンサートホールでソロリサイタルを開催し、現地メディアや専門家の絶賛を集めた。

指揮者ジョナサン・ノット氏の指名により、同氏の東京交響楽団音楽監督就任披露演奏会においてソリスト(ブラームス:ピアノ協奏曲 第1番)を務めたのははじめ、NHK交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、山形交響楽団、ベルギー国立管弦楽団など内外のオーケストラと共演。2007年にデビューアルバム「ラ・カンパネラ〜珠玉のピアノ小品集」(ナミ・レコード)をリリースして以来、活発なレコーディング活動を行い、日本と欧州で多数のCDを発表。NHK「ららら♪クラシック」「ベストオブクラシック」、テレビ朝日「題名のない音楽会」、BSテレ東「おんがく交差点」など放送出演も多い。

アンサンブルピアニストとしての活躍は特に知られており、「トリオ・ジャパン」(with石田泰尚・西谷牧人)、「トリオ・スペリオール」(with泉原隆志・上森祥平)の各メンバーを務めるほか、著名アーティストから絶え間ない共演オファーが寄せられ続けている。

近年は作曲にも本格的に取り組む傍ら、執筆・配信・レクチャーなどさまざまなチャンネルを通じて音楽の魅力と奥深さを次世代に伝える活動に力を入れている。

公式サイト ▶ www.takashi-sato.jp

